
緋弾のARIA ～導かれし者～

TETO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 〈導かれし者〉

【Nコード】

N2593V

【作者名】

TETO

【あらすじ】

二つも力がかえる主人公が武偵校で仲間達と過ごしていくお話です。

原作に主人公が入ってく感じですよ。

オリジナルキャラもたくさん入れていくのでよろしくお願いします。

0 話

†新しい一日†（前書き）

お話は、あらすじ通りです。

初めての作品です余りうまくできていないかも知れませんが、広い目で見てください。

0話

十新しい一日十

俺の名前は、諫風 真

「いさな まこと」そこまでやりたいことはなく親の進めで、武偵高に入った。

最初の試験からずっとSランクである。

Sランクになれたのは小さい頃から射撃を親の趣味でやらしてもらってあたから銃の扱いは慣れていたし、家がもともと一般的な物とは少し違うが剣道と武術を教えていてそれを教えられていたから剣術と武術もできたからであろう。

あまり好きではないが小さいときから不思議な力をつかえていた。力といっても空気を圧縮して壁を作ることと、黒い炎を何故か使えるぐらいだ。

多分そんなことなどができたから俺はSランクになれたのだと思う。別にランクなどにはあまり興味がない。

興味をもつとしたら毎週の週間少年ジャンプになら興味がわく。

こんな風にただ俺は、平凡に生きていきたいと思う青年である。

そうただ平凡に生きたいのである平凡に。

ある日いつもの用に学校へ歩いて行っている。

俺が学校まで歩いているその理由は、いつも武偵高行きのバスはあるが朝からたくさん人が乗っているバスに乗りたくないという理由があるからであるから乗らないでいる。

学校につき、教室に入るといろいろな奴がいる。

男の仲のいい奴は遠山キンジ、武藤剛気たちだ。

周りから見るといかにいい奴等だがかなり優しい。

女で仲のいい奴は峰理子。

こいつは勝手に話してきていつの間にか友達になっていた。

ほかには諫那クルミこいつは俺のいところで小さい頃から一緒に剣を習っていて剣の腕は俺より上である。

仲のいい奴はこれくらい奴らぐらいだ。

今日は、転校生来るとか言っているのを聞いて少し気になっている俺である。

0 話

†新しい一日†（後書き）

どうでしたか？今回は、主人公の紹介をしました。次回作は、原作を少し入りますので期待をしてください。

それとアドバイスなども受け付けているので意見があつたらお願いします。

1話

十寝起きの行動十（前書き）

前回の続きのお話です。

主人公の元パートナーが出てきます。

1話お願いします。

1話

十寝起きの行動十

「それじゃあ入ってきてください」

転校生が転校してくるとは聞いていたがまさか俺らのクラスだとは思ってもしなかった。

「それじゃあ名前をお願いします」

「神崎・H・アリアよ」

「おおー」とクラス全員が感心の声を出した。

ビミョーと思いつつ周りを見てみたらキンジが、なぜだか顔色が悪くなっている。

見るからに会いたくない感じだ。

「あたしそこ席がいい」

しょかいから偉そうに言っている転校生である。

「はい先生、神崎さんと席を交換してもいいです」

「それじゃあ武藤さんと神崎さん席の交換をお願いします」

「はい、これ」

神崎が投げたのは、なぜだかベルトだ。

「はいはいはーい理子わかつちやったー。キーくんベルトしてない、それを転校生が持ってきた、つまりそれは二人でさっきまでラブラブしていた」

俺は本当かよと半信半疑で聞いたら周りは、お祭り騒ぎになっている。

辺りからは

「ひゅーひゅー」

「遠山くん、女なんかに興味ないと思っていたのにー」

「ち、違んうだ、違うんだこれは」

大変そうだなーキンジのやつも。そのあと睡魔に襲われすぐにねてしまった。

起きた時には時間が、12時を回っていた。俺も飯を食いに行こう

と立とうとしたん後ろからきゅうに叩かれた。

俺も飯を食いに行こうと立とうとしたん後ろからきゅうに叩かれた。

「いつまで寝てるのよ！」

叩いてきたのは、イトコのクルミだった。

「しょうがないだろ、寝むかったんだからそういう時あるだろお前も」

「私は、まこと見たいに寝ないもん。まことご飯どうするの？」

「べつに決めてないけど」

聞いたとたん目をキラキラさせながらこれお待っていたのかのよう
に聞いていた。

「本当！お弁当二つ作ったから、一緒に食べない？」

何故二つ作ったのがよくわからないがくれると言うならもらって損
はないからもらうことにした。

「そういえばさ、最近なんで強襲科にいかないの？」

自分で作った弁当を、食べながら言ってきた。

「別にいなくなたって依頼ばっかしてれば食っていけるし」

「よくないよ！たまには強襲科に行って訓練しないと」

ご飯粒を、飛ばしながら言ってくる。

「わかったから米粒飛ばしてくんな！」

「あ、ごめん」

さりげなくOKしてしまった。OKしたならいくしかないか。

本当に来てしまった。あのうるさく、硝煙の臭いしかない強襲に来てしまった。入ると急に全員がこっちおむいてきた。

「久しぶりだなーまこと！」

「なんで今まで来なかったの？」

「俺と手合わせしようぜ！」

いっせい言われてもこまる。

「まー、いろいろあったんだよ」

「肩慣らしに俺と勝負しようぜ」

勝負しようと言ってきたのは、前パートナーの新崎智也だ。こいつは、みんなから細マツチョと言われている。だが、あだ名どうりマツチョで、武術が得意だ。

「あぁいいぜ！」

久しぶりの手合わせにワクワクしている俺である。

「それじゃあ上に来てくれ」

二人だけで階段を上がろうとしたら、周りの奴らもついてきた。

「それじゃあ始めますか」

そう俺が言って構えた。

「それじゃあ始めます。レディーゴー」
後輩が言って二人が動いた。

1話

十寝起きの行動十（後書き）

どうでしたか？ 0話、1話と続き余り話が進んでないですが・・・
次からは戦いのシーンが出て来ますのでどうぞご期待お。

2話

＋新たな出会い前編＋（前書き）

少しミスがあったので修正しました。

2話

十新たなる出会い前編十

最初に拳を当てたのは、新崎の方だった。左手で俺の右にボディーパーを、くらわした。

「う・・・」

なんとか右手でガードしたが、かなり右手に響く。さすが新崎ってところか。

「久しぶりにお前の拳に触れた気がするよっ」
喋った瞬間に俺も新崎に突っ込んだ。

向こうは、させないという感じで左ストレートこれは顔面コースにきたが、俺はそれを待っていた。

俺は新崎の左手にかぶせる感じに右手をはなち体全体に力を入れて右手を、新崎の顔面に向けておもいきり振った。

俺の右手は、新崎の左手をかぶさりながら顔面に当たった。

この技は、ボクシングの技の一つで、相手の左手にあわせて右手をあわせて顔面にはなつ技である。

「よし、決まった」

俺がそう呟くと後ろのギャラリーがさわぎだした。

「おおー、決まったまことのカウンター！」

「久しぶりとか言ってたが、すごすぎだろ」

新崎が立ち上がる。

「あー頭がクラクラする。本当に久しぶりの奴がするパンチか？でもさすがまことだな」

左ほっぺをおさえながら言ってきた。

「まあ、昔と今は変わんないってことかな」

「あ、やべもうこんな時間かよ。すまん俺が誘っついてなんだか、これから俺用事あるからまた今度手合わせしようぜ」

「あ、ああー」

新崎はあわてて出て行った。

「二人とも一発当てて終わりかぁー。久しぶりなのにあまりにもあつけなく終わってない？」

後ろからくるみが言ってきた。

「しょうがないだろ、新崎が用事あるんだから」

左手をおさえながら言う。

「そう言えばさっき、教師科の綴先生がまことの事呼んでたよ」

「マジかよ、なんで呼ばれないといけないんだよ」

「あはは、多分全然強襲にこないからだよ」

「で、どこ行けばいいんだ？」

「職員室だと思う」

「だと思っとかあばうとなすぎだろ」

俺は急いで強襲科をでる。後ろからアバヨなど言ってきたので手を振っておいた。職員室に入ったらタバコを吸っている綴梅子が座っていた。

「おおー、やっと来たな諫風。呼んだ理由はわかっているな」

「わかりません」

目を逸らしながら言う。

「はぁーお前さ、最近なんたで強襲科に行かないんだよ、一応Sランクの武偵だろうが」

「別に行くのがめんどくさいからですよ」

「めんどくさいから行かないじゃなくいけよ!」

「無職とかないんですか?」

「無職だと」

「そう、無職!クエストだけを受ける、いわゆる働くニート」

「ニートが学校来るかよ」

「ああそうか、でもそういうのよくないですか?」

「よくないから、いくら単位が揃っているから行かないじゃなくてよ週に2、3回はいけよ」

「はぁ・・・」

「それだけだ、早く帰れほら帰った帰った」

俺は言われるままに職員室をでた。

もう時間が6時をまわっていたから帰る事にした。

「はあ、今日はかなりめんどくさい1日だなふあー」

俺は、言葉に出して呟きあくびをした。

少し歩いていたらあまり人のいない公園のシーソーの上で、うつぶせで寝てる子がいた。顔は見えないが髪が腰のところまできていて髪の色が、黒に少し青が混ざった紺色だ。だが何故公園のシーソーなんかに寝ている。

まさかのホームレス!?

2話

＋新たな出会い後編＋（前書き）

0話1話2話前編の話しが短くごめんなさい。

今回は長めのお話にしたのでお願いします。

2話

十新たな出会い後編十

どうしよう誰も近くにいないし、病気とかだったら危ないし手を差し延べるべきか差し延べないべきか。

うーん……

よし決めた困っている人には、手を差し延べるべきだ。
と、思ったもののどう話かけたらいいか全然思いつかん。

うーん、大丈夫？
でいいかな。

「……」

よしそれでいこう。

「あのーだ、大丈夫ですか？」

「うう、何？」

まじかで見るとかわいいな。

目は、深い蒼色の瞳をしていて、髪は思った通り腰ぐらいまできている。

年は、俺と同じぐらいだ。

「なんでこんなところで寝てるの？」

「ああー、美希ねアメリカに留学していて今さっき帰って来たんだけどお金が日本円じゃなくドルのままだから何もできないから

まず、武偵だから武偵校に行こうとしたんだけど迷子になっちゃって、お金もないし泊まるとこないから野宿して明日を待とうとしたの」

「野宿はさすがに都会は、危ないと思うなあー」

「そうかなあ、君もしかして武偵校の人なの？」

「あ、そうだけど案内しようか」

「うーん、でももう遅いしもっと快適に野宿出来るところ教えてほしいの」

「野宿って言われてもそんなところあるわけ・・・」

少し黙り込む俺である。

「もしかしてあるの！」

うれしそうに聞いてきた。

「快適には寝れるけどちょっとね」

「どこどこ」

「いやー、俺の家マンションなんだけど、部屋が二つか三つあるんだけど、あ、いやなんなら野宿の場所探すけどどうかな」

「家に泊めさしてくれるの！」

「ああ、ううん」

「本当に本当に本当！やったーちゃんと屋根の下に寝れるうー」
うれしそうに飛び跳ね始めた。

「本当にいいのかよ、男と一緒に屋根の下に寝るんだぜ少しは武偵なら用心しろよ」

「用心なんかしなくてもそんなに心配してくれる人は悪い人じゃないと思ったから平気なの」

よくわからん。

「うう」

急に彼女は、前かがみになった。

「大丈夫か？まさか病気とかなのかまず、病院に」

「ぐうー」

彼女の腹の音が俺の言葉をさえぎった。

「ゴメンなにかおごってくれないかな」

「そこのファミレスでいい？」

「うん、ありがとう」

彼女と二人でファミレスに入り店員さんに案内されて席に座ると彼女が聞いてきた。

「私かなり食べるほうだけど大丈夫かな？」

「大丈夫平気だから好きなだけ食べていいよ」

「本当！ありがとう」

そう言って彼女はピザとミートソーススパゲティーとサラダを頼んだ。

俺は彼女と同じスパゲティーを頼んだ。

「そういえば名前何て言うの？」

「諫風真ごんぷまことだよ」「まことくんかぁーカッコイイ名前だね。」

私の名前は、坂本美希って言うんだよ」

「美希って言うんだ、美希は何年生なの？」

「美希は、高二だよ」

「高二って俺一緒じゃん」

スパゲティーなどがきて美希がサラダ食べながら言ってきた。

「ほおんほお、ひいうはね」

「食べてからしゃべれ」

美希はコクリと頭をふりまた食べ始めた。

「あーおいしいかった。まことくんの家って男子寮だったりする？」

「違うよ、俺は、大勢暮らすの苦手だからマンションで一人で暮らししてる」

「そっかー、えらいねまことくんは」

「そんなことないよ一人暮らしするならみんなこんな感じじゃない。美希だってアメリカで一人暮らしじゃなかったの？」

「美希ね、うちお金があったから世話してくれる人を頼んで全部世話してくれたの」

「そっかー、美希の家金持ちなんだ」

「うん、そんなうれしくないけどね」

過去話をしながらレジで会計を終わらせ外に出た。

出た時にはもう7時を回っているいろんな店の看板の明かりや街灯などが光はじめていた。

気づいたら俺が住んでいる十階だてのマンションに着いていた。

部屋は3階の302号室にあり美希と二人でエレベーターに乗り部屋に入った。

部屋に入ると玄関や廊下は真っ暗だから電気をつけた。

美希を狭いマンションの中を案内しながらリビングに来了。

「以外に広いねこの家」

「そうか？そんなに広いつてわけでもないが。そうだ美希風呂はどうする？着替えなら俺のジャージならかせるけど」

「下着とかならこのバックにあるから」

見せてきたのはオレンジ色で色々なアプリケが付いていた。

「うわ、すごいね」

「うん、これ美希のお気に入りなの」

うれしそうに言ってきた。

「それじゃあ先に風呂入っていいよ」

「ありがと、そだシャンプーの指定とかある？例えば一回しか押しちゃいけないとか」

「とくにないから普通に使っていいよ」

「うん、本当にありがとねまことくん。あ、そうだのぞかないでねのぞいたらいやあんなの」

「そんなことしねーよ」

「アハハじょーだんだよ。それじゃあ、お風呂借りるの」

「ああ」

美希は鼻歌を歌いながら風呂に向かった。

「さてと美希の布団を出すか」

俺は、昔使っていた布団を取りに行った。

たんすを開けたら布団があった。

「どうしよかな美希に俺のベットを貸して俺がこの布団を使うか」

俺は、布団を背負いながあまり広くない廊下を歩いていたら風呂場から声が聞こえた。

「まことくんタオルどこかな。できれば大きいのと小さいのが使いたいんだけど」

「風呂からでて右側の茶色のたんすの一番上が大きいタオルで、上から2番目が小さいタオルだよ」

「うん、ありがとなの」

俺が大声で言ったら向こうも大声で返してきた。
俺は布団をまずリビングにおいてリビングに寝ることにした。
まだ寝ないからソファアに座りテレビをつけた。
少ししたら美希が風呂から出てきた。

「まことくん美希出たから入っていいなの」

「ああ、うん」

俺は、風呂に向かった。

俺は、体を最初に洗い湯ぶねにつかった。

まだ時間は全然たつてないけど女の子がいるのにあまりそんな感覚がない。

俺は、そう思いつつ湯ぶねに潜った。

「ぷはあー」

多分ほかの男子は女の子がいるだけでかなり興奮するんだろう。

俺は、いところが女でしかも一緒に住んでいたからそんな実感が湧かないからかもしれない。

風呂から出て体を拭き服をきて洗濯物を洗濯機を回そうとしたら美希の下着があるのに気づいた。

みずたま模様のおちゃまな感じの下着だった。

だがそれをすぐに隠し美希にどうすればいいか聞いた。

「美希、お前の服洗っていい？」

「いいよ、でも下着をずっと見ないでね」

「見るか！」

リビングから笑い声が聞こえた。

俺は、下着をあまり見ないようにして洗濯機を回した。

俺がリビングに戻ると美希がソファに座っていた。

「あ、まことくん美希どこで寝たらいいの？」

「ああー美希は廊下を出て左の部屋のベッドで寝て」

「まことくんは、どこで寝るの？」

「俺はここで寝るよ」

「そっかーじゃおやすみ」

「うんおやすみ」

美希がドアの前で止まった。後ろ姿からしてなにか戸惑っているのがわかる。

「どうしたの美希」

「あ、あのさ美希アメリカでずっと一人ぼっちですごしてたからこんな誰がいるっていうのがすごくうれしかった。変な相談なんだけど一緒に部屋で寝てくれないかな」

俺は少し黙り込んだ。

美希は俺とは真逆の生活をしているのが今わかった。

ここは一緒に寝てあげた方がいいのか悩んだ。

うーん……

「わかった一緒に部屋の寝るよ」

「本当！やったー、ありがとうまことくん」

これは美希のさっき言っていたことを同情した結果であると思う。

俺と美希は部屋に向かった。

俺は布団を持っていたから前があまり見えないから美希にドアを開けてもらうなどサポートしてもらった。

部屋に入ると急に美希が軽く走ってベットに向かった。

タッタッタ……バン

ギー……ギー……ギー……

ベットの中のバネがなった。

「はぁー まことくんの匂いだぁ」

会って間もない人の匂いがわかるのかよと心の中でツツコミを試してみた。

「そうだ明日どうするの？」

「なるべく早く来いって言われてるから早く行くよ まことくんは？」

「俺は起きるの遅いから遅く行くよ。美希武偵校の場所わからないから地図をケータイで送るから明日送る地図を見ながら行ってね」

「了解、あとまことくんのメアドもちょうだい」

「わかった。じゃ赤外線通信で」

トゥルン♪

ケータイの赤外線通信の音になった。

「まことくんのメアドゲッチュ」

「べつに俺のメアドなんか珍しくもないだろ」

「私にとってはうれしいことなんだよ、ケータイっていつでもメールなんか全然やらないしましては、人のメアドなんか全然持つてないんだよ」

「あっちだと友達なんて一人いたら私にとっては奇跡に近いぐらいなんだから」

美希が悲しそうな顔で言ってきた。

「ごめん美希そういえばずっと一人だったんだよな。でも俺がもうお前の友達だ、だからもう一人ぼっちなんかじゃないんだぜ」

「うん、ありがとねまことくん」

「ああ、これからずっと友達だ」

「そんじゃもう電気消すぞ」

「うんおやすみな」

はあー、今日はかなり変わった一日だったからかなり疲れたなあ。でも、そんなにやな奴じゃないからあの時助けて損がなかったからよかったけど。

「もう食べられないよー、はふうー」

急に美希の方から声が聞こえてきた。

どんな夢見てんだよ、にしても寝るの早いな、あのまま野宿してたら変な人に連れて行かれてたんじゃないか。
やっぱり声をかけてよかったのかな。

一人で悩む俺である。
ま、考えてももう遅いから寝るか。

ピピッピピッピッ

「うう、なんの音だよ」

俺は、朝からなる音に目が覚めた。
起き上がると美希のケータイの多分目覚ましだろう。
だが、目覚ましが鳴っているのにもかかわらず美希は気にせず寝ている。

「おいおい早く起きるんじゃないのかよ」

「アハ、おいしそうなの」

本当どんな夢見てんだよ。

俺は、寝てる美希を起こさないよう部屋を出てリビングに行った。

「はぁー、久しぶりに早く起きたきがする、目覚ましかけた本人が起きないでかけてもない人が起きるとかなんかおかしくないか」

コップに水を入れながら言う。

時間を見るとまだ6時にもなっていないかった。

「早く起きたから行く途中で頼んでいたものを取りに行くか」

家から武偵校に行く途中に、武偵校附属の店がありそこで銃や刀が買えるのだ。

だが、たいていみんなは装備科に頼んでいるが俺は、行く途中にあるからいつもそこで済ましている。

「ふぁー、おはようなのまことくん、はふう」

美希がやっと起きてきたがかなり眠そうにしている。

「おはよう、美希それで何時武偵校に行くの？」

「今何時なの？」

「6時前だよ」

「じゃ、もう少し寝るよ」

「今から寝て間に合うのかよ」

「大丈夫なの」

「いや大丈夫じゃないから」

美希はソファでまた寝てしまった。

「どっだけ寝るんだよ美希、おい起きろ美希、早く行くんじゃないのかよほら一緒に行けるから早く準備しろよ」

美希が急に起きあがった。
起きたかと思ったら目をこすってリビングを出て行った。

バン！！

リビングの扉が思いっきり開いたと思ったら美希が着替えて立っていた。

「まことくん遅いよ！」

「あ、いや、あのー、あ、はいわかりました」

さっきまで寝てた奴がよく言うぜ。
にしても着替えるの早すぎだろ美希の奴やればできるのになんてや
んないのか。

「準備できたぞ」

「うん、じゃ行こうかまことくん」

「あ、行く途中でコンビニと頼んでいるものがあるからそれを貰って行くけどいい？」

「うん、わかったの」

「んじゃ行きますか」

マンションを出たら何故か入口の真ん前にリムジンが止まっていた。俺達は、無視して行こうとしたらリムジンが俺達の行く方向に合わせてついて来る。

「なんなんだよさっきからもう、ストーカーしてくんじゃねーよ」

俺がリムジンに向かって言うとりムジンの窓があいた。

窓から見えたのはピンク色のツインテールの少女が見えた。

よく見ると昨日転校してきた、たしか神崎だったけ？でも俺になんかようかよ。

「ストーカーなんかじゃないわよ、ちゃんとあんたの家の前にいたのにあんたが勝手に行ったんでしょ」

「そんなこと知るかよ別に前が勝手にいただけでなんでついて来ているんだよ」

「話があるからよ」

リムジンの中から真剣な顔でいつてきた。

「話ってなんなんだよ」

「まず二人とも入って」

「二人ともって美希もか？」

神崎は頷きリムジンのドアが開いた。
リムジン中に入ると中は例外と広く、飲み物が積まれているところは高そうな物がたくさん並んでいた。
さすがリムジンで皮でできているソファァーに近い物に座るとかなり柔らかく俺の家より柔らかかった。

「んで、話ってなんだよ」

「まこと私の奴隷になりなさい」

指をさしながらいきなり意味のわからないことをいつてきた。

「はぁー？」

「私が作るパーティーに入って一緒に武偵活動をするの」

「嫌だ、知らない奴のパーティーなんかに入ってたまるか」

「もう決めたことなんだから文句を言わない」

「勝手に決められたら誰だって文句ぐらいするだろ」

「そんなこと私には関係ないわ」

平然とした顔でコーヒーを飲んでいる。

「関係ないだろなんでお前が勝手に決めてんだよ」

「事情よ事情」

「意味わかんねよ」

「理解しようとしなから解らないんでしょ」

「いい加減にしろよ、なんでお前が全部決めつけるんだよ」

「私には時間がないからよ」

「はあ？それこそ意味わかんねよ」

「べつにわかんなくていいわ」

「いい加減にしろよさつきから言っていることがバラバラじゃないかよ、お前は何が言いたいんだよ」

「だから私のパートナーになるのよ」

「俺のこと何も知らねくせにほざいてんじゃねえよ」

「昨日強襲で新崎と手合わせしていたでしょ、まことはボクシングの経験者でしょあの時のカウンター、プロでも打てるかわからないぐらいだったわ」

「あんなの誰だってできるだろうが、たったそれだけで決めんなよ」

「ちゃんと他にも調べたわ」

「何おだよ」

少しキレ気味で言った。

「今言うわ、諫風真 青森県出身 幼くして武術・剣術を教わり小
学生の年にしてSランクになった。初任務ではミス無しで十人以上
の大人を倒したほどの実力者。それでつけられた名前が黒のロング
防弾コートを着ていたことから黒の死神、幼くしてあれほどの実力
者だとは皆が疑うほどだった。どう？ちゃんとわかっているわ」

「ああよくわかっているがお前とはパートナーにはならない。いく
らお前がそれなりの事情があったとしてもな」

「何で、ちゃんとあんたの事わかっていたじゃない、何がダメかそ
れを言ってみなさいよ」

「俺はお前みたいにな奴が一番嫌いなんだ」

「そんなに私が嫌いなのか？」

「ああ、大嫌いだ！」

「次言ったら風穴！」

急に銃を向けて言ってきた。

「脅しのつもりだろうが俺にはそんなことしても何も感じねえよ」

「どうしてそんなにパートナーになりたくの」

「ああ、俺はお前みたいな自分勝手な奴とはパートナーなんかになりたくないね、なったとしてもうまくやっていける気がしねえよ」

「どうして、どうしてみんな私の事わかってくれないのなんでなんで教えなさいよ」

泣きながら言ってきた。

それなりの理由があったのかもしれないがこんな性格な奴に俺はついていける気がしない。

「もうわかっただろ俺にも用事があるんだからこの車止めろよ」

「・・・」

「おい無視かよ、おい運転手この車止めろ」

「どうしますお嬢様」

「いいわ止めて」

やっと諦めてくれたか。

ちようどよくコンビニの前に止まってくれた。

しかも俺が行きたい店の近くだったからそれはありがたい。

止まったから美希のほうを見ると爆睡中だった、たしかにさつきから静かだった理由がこれか。

「はあー」

「おい美希起きろ着いたぞ」

「うう、お話は終ったの」

「ああ、終ったから降りるぞ」

「おい美希起きろ着いたぞ」

「うう、お話は終わったの」

「ああ、終わったから降りるぞ」

降りてコンビニに入ろうとしたら何故か神崎が着いてきた。

「なんでついて来るんだよ」

「私も用があるからよ」

何がしたいんだよコイツはそんなにパートナーが必要なのかよ。

「美希朝飯選んでいいぞ」

「え、なんで？」

「なんでってまだ朝飯食ってないからに決まってるだろ。あ、でもおにぎりとかみたいなの歩いて食べられるやつにしるよ」

「うんわかったの」

俺はあんパンにお茶を持って美希を探していたら美希がおにぎり5個ぐらい持ちながらやってきた。

「おいおい朝からおにぎりそんなに食べるのかよ」

「おにぎりは好物なの」

「ま、わかったからレジに並ぶぞ」

レジに並んだら前には神崎がいた。

何を買うのか気になり前を覗いて見ると何もなかった。

すると

「ももまん十個」

おいおい今時ももまん十個なんかどうにかしてるぞコイツ。

そう思っている内に俺の番になっていた。

「868円です」

【チャリン】

俺は868円ちょうど払いレシートをもらわずにコンビニを出た。

コンビニから出たら神崎が立っていた。

「今度は何だよ」

「武偵校まで送ってあげるわ」

「結構です。俺はまだ寄るところがあるから遠慮しとくよ」

「あっそ、なら御礼として一緒に行ってあげるわ」

「何でそうなる。すぐそこだからついて来んな。おい美希行くぞってあれ？おい美希どこだよ」

あ、いた コンビニの前のベンチに座りながら呑気におにぎり食ってやる。

「美希おにぎり好きなことわかったから行くぞ」

「あ、まことくん待ってなの」

二人で歩きながら神崎の事は無視して歩いていたら神崎の乗っているリムジンがまたもやストーカーして来る。
だがもう無視する事にした俺にはもうどうでもいい。

少し歩いていたら美希が聞いてきた。

「寄りたい店ってどこなの」

「ああすぐそこの渋沢屋って言う店だよ」

「なんか変な名前」

おにぎりをくわえながらさりげなく言う。

「ほら着いたぞ」

「あ、本当に変な名前なの」

「ま、いいから入るぞ」

ガチャ

店の中のレジには誰もいなくすっからかんだった。

「まことくん誰もいないよ」

「まあ見てろって、おっちゃん頼んでた物取りにきたよ」

「まことか少しまってる」

「ほら、居るだろ」

「でも、どこに居るの？」

「ああ、2階にいつもいるよ」

「何で？」

「2階が作業場なんだよ」

「へえー」

「お、ついにあのまことが女の子を連れて歩いてる」

「ちげえよ、たまたま昨日知り合っただよ」

「本当かな」

ニヤニヤしながら言ってきた。

「それより頼んでいた物」

「ああ、できてるぞ ほら」

「さすが、おっちゃん頼んだらちゃんとやってくれる」

「まあな、客えの信頼が命だからな。んでほれ」

「ん、なんだよこれ」

「頼んでいたワイヤーだよ、俺が世界初の約二人までたええ百メートル以上までのび本体に着いているボタンを押せばワイヤーの先のフックが開いたり閉まったりしてひかっけたり外したりできる最新ワイヤーだ。」

それとそのワイヤーを握って摩擦で破れない用に改造した手袋、そしてその黒の防弾ロングコートの袖と腹のところにそのワイヤーを入れられてちゃんと引っ張られても取れないようにしてあるからな。それとその俺またまた特製両刃ナイフ二本にボウイナイフ、ファンイテイングナイフ二本ずつの柄の先の部分にワイヤーを付けられるようにしてあるし黒の防弾ロングコートの両方の脇腹と腰のところにナイフ入れられるようにしてあるからな」

「さすがおっちゃんありがとな」

「あ、そうだ忘れてた、たしかまことお前今銃無いんだろ」

「そうだけど何で知ってんのおっちゃん」

「お前のいとこさんが言ってたぜ、ほらそこで座って待ってろ」

くるみのやつ余計なことお。

「何でも持っているんだね」

「まあそこんところはすごいよな」

美希と話していたら2階からおっちゃんが戻ってきた。

「ほらこれやるよまこと」

「ん、これはソードカトラスじゃないかよしかも二丁もこれくれるのか」

「ああ、この店の常連客にえの大サービスだよ。お嬢さんにはこれお」

「ん、美希に？」

「ああ、君にだ」

美希が貰ったのはC Z 75 FULL AUTOだった。

「何で美希に？」

「何でお嬢さんも銃貫ってないでしょ」

「何でわかるの？」

「感だよ感」

「ありがとなの」

「美希も銃なかったねか」

「うん、前の壊れちゃってこっち来てから買いなおそうと思って」

「美希ちゃん留学生なのか」

「うん、生まれたのは日本だけどアメリカに留学してたの」

「へえー、それにしてもまたかわいいな、彼氏とかいるのか」

「そんなのいないよ」

「なら、まことのことはどうだ」

俺がカトラスやワイヤーに目がいつてるときに勝手に勝手に変なことを聞くなよ。

「まことくんは優しくて好きだよ」

「おお、よかったなまことこんなかわいい子が彼女で」

「そんなんじゃないよ」

「照れるなって男らしく無いぞまこと」

「アハハ まことくん面白い」

なぜそこで笑う。

「もう時間だから行くねおっちゃん、美希ほら行くぞ」

「うん、ありがとなのおじさん」

「また来てもサービスしてあげるからね」

「あ、そうだおっちゃんこの店の裏口貸してくんない」

「何でだ」

「店の前にリムジン止まってるだろさつきからストーカーして来るんだよあの車」

「知り合いなんじゃないのか」

「しらなえよ」

「ハハまあそこだから好きに使いな」

俺はおっちゃんに教えてもらった裏口に行って店を出た。

裏口を出て神崎がいなくて安心した。

だが早くしないと見つかってまたストーカーして来そうだから急がないと。

俺は今日貰った物からワイヤーを取り出して試しに使う事にした。あたりを見渡して引っかけるところを探したが無いから力を使う事した。

俺に生まれながら持っていた二つの内一つの力、名前は空気の壁【

エアブロック】空気を圧縮して自分以外には見えない空気の物体を作ることができる。
もちろん触れるしその上に立つ事もでき動かしたり飛ばしたりできる。

空気の壁を隣の家の屋根の上に作りワイヤーを飛ばした。

ワイヤーは空気の壁に何回か回転してワイヤーのフックがワイヤーに引っかかり大丈夫か引っ張って確認して美希に話しかけた。

「美希今から屋根の上に行くから俺につかまっとけ」

「どんな感じに？」

「落ちない用につかまっとけ」

コクッと頷き美希が俺の胸のあたりにしがみついて俺は美希の腰のあたりをつかみワイヤーの説明書の通りにワイヤーを軽く引っ張ったらワイヤーが5秒もかからない内本体に戻ってその反射力で屋根の上に来ていた。

「おお、すごいねそのワイヤー。でもこれからどうするの？」

「このまま屋根の上を飛んで行く」

「ええー、何でそんなことすんの、ちゃんとした道を通ればいいじゃん」

美希お前の気持ちも分かるがそっちに行ったらあの神崎がいるというのを考えてくれ。

だが、だんだん美希の目が涙が出てきそうだったから諦めることにした。

「わかったから泣くなほら降りるぞ」

俺は神崎の乗るリムジンの近くに行く用空気の壁にワイヤーを絡ませ飛び降りた。

周りにいた人達は、驚いていたがそれを無視しながらワイヤーをしまい神崎の乗るリムジンに行った。

リムジンの前に立つと勝手にドアが開き中にまたはいった。

入ると神崎は目をつむりながらなんか考えごとをしていた。

美希のほうを見るとコイツはコイツで寝ていた。

まだ5秒もかからぬ内に嬉しそうに寝てやがる。

はあー・・・

やる事が無い俺はどうしたらいいのかリビングのふかふかの席に

腰をかける。

俺もいつの間にか寝ていて起きた時にはもう武偵校まで来ていた。前を見ると神崎の姿は無く美希は俺と同じくらいのタイミングで起きた。

リムジンから出るとみんな学校に入っていた。

すると美希が話しかけてきた。

「まことくん美希まず先生のところに行かないといけないからここでお別れなの」

「おう、またな」

ん、まてよ何でまたななんだまだ美希が同じクラスになるかまだわからないのに。

ま、いいか。

なれたらなれたでいいか、あまり悪い奴みたいな感じじゃなかったからな。

階段を上がりながら考えていた。

2話

十新たな出会い後編十（後書き）

どうでしたか？

次回はまこととアリアの対決を考え中です。

それともう少しオリジナルのキャラを入れていこうと思っているので超能力を募集中です。

何でもいいですが、超能力を使うための条件などの詳しいところまでお願いします。

いいのと思いついたらコメントのところにお願いします。

最後に今までの話しでのここが違うやここの言葉こうじゃないのみたいなミスがありましたらコメントのところに教えて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2593v/>

緋弾のアリア ～導かれし者～

2011年8月29日18時41分発行